

紅葉で彩づく「北陸 7 名城」の旅

浪崎 正憲

11 月 21 日～22 日に阪急交通の「紅葉で彩づく北陸 7 名城秋彩探しの旅 2 日間」に参加し、富山城跡公園、高岡城跡公園、金沢城跡公園、丸岡城、福井城、一乗谷朝倉氏史跡、大野城を見学しました。タイトルにあるように訪れた場所は、それぞれ紅葉がとても美しく良いときに尋ねることが出来楽しい旅になりました。

1 日目「11 月 21 日(木)」

1 高山まで列車、その先はバスの旅

名古屋駅 7:45 の「特急ひだ1号」に乗りこんだのは、31 名の参加者。受付の時添乗員の説明で「今日のお昼はバス車中で食べていただくこととなります」と云う。更に、途中のサービスエリアではコンビニがある位なので、今から仕入れておくことをお勧めします、と云うので、急いで名古屋駅の売店で助六寿司を二つ買ってきました。これだと妻が食べきれない分を私がもらえて丁度良い塩梅だからです。弁当を確保してやれやれ一安心、列車は3号車に乗り込み 3A・3B席に落ち着きました。おもしろいのは、岐阜までは席が後ろ向きになっています。これは岐阜から列車の進行方向が逆になるため、あらかじめセットされているのです。

特急ひだは、岐阜、美濃太田、下呂に停車して高山に 10:16 到着します。10:30 にはバスに乗り換え、「中部縦貫自動車道」を経て「飛騨清見IC」から「東海北陸自動車道」に入ります。ここから「小矢部砺波(おやべとなみ)JCT」を経て「北陸自動車道」を走って富山城跡公園へ向かいますが、「小矢部砺波JCT」手前の「城端(じょうはな)SA」まではトンネルの連続です。

白川郷の手前にある飛騨トンネルは、11kmと長いものもあり、ちょっとうんざりするだけでなく、気分が滅入ってしまいます。今建設中のリニア新幹線が完成すると、ほとんどトンネルというか地下を走ることになり、気分が悪くなる人も出てくるのではと余分なことを考えてしまいます。電車の旅にしる、バスの旅にしる、景色が眺められないなんて旅ではありませんから…。

やっと「城端SA」に到着すると、確かにトイレとコンビニだけのちょっと寂しいSAで、これだとSAと呼ぶにはおこがましく、PAと思われま。

ここからしばらくして北陸自動車道に入ると、まもなく最初の見学地である富山城址公園に到着します。

2 お濠と石垣と芝生が美しい富山城址公園

12 時 30 分頃に富山城址公園に到着し、さっそく公園の見学です。初めに目についたのは、富山市が売り出しているトラム(市内を走る路面電車)でした。



丁度停留所がすぐ隣にあり、黒塗りの車両が入ってきました。低床式の最新式の車両で一度は乗ってみたいと思いました。

公園は芝生の広い庭が印象的です。旧本丸鉄門跡の石垣の上に建つ櫓は、昭和 29 年(1954)に開かれた産業復興博覧会を記念して建てられた博物館です。ここにお城があったとすぐわかり、今では市のランドマークとして市民に親しまれています。

そして、何といたってもお城にお濠はつきものです。石垣とお濠はお城のイメージを創る大切な要素で、そのお濠には冬の鳥かもがたくさん泳いでいました。それに、都会にあるお城らしくお濠にはビルの影が映りこんでいます。広い庭園を散策すると「楽しい立て札」を見つけました。芝生の庭にあった立て札の文面は、「告 カラスに告ぐ ここで餌を食うべからず」とありました。つまりは人に注意するところを、カラスに注意している形をとって、とてもユニークです。これならみなさんも、カラスと一緒にされたくはないと思いルールを守ることでしょう。



ここが一番の目玉は千歳御門です。これは富山藩 10 代藩主の前田利康の隠居所として建てた千歳御殿の正門で、総ケヤキ造りの三間一戸の薬医門。東大の赤門(本郷の加賀藩江戸上屋敷の門)と同じ様式で、全国的にも数少ない江戸時代の城門です。

ここが一番の目玉は千歳御門です。これは富山藩 10 代藩主の前田利康の隠居所として建てた千歳御殿の正門で、総ケヤキ造りの三間一戸の薬医門。東大の赤門(本郷の加賀藩江戸上屋敷の門)と同じ様式で、全国的にも数少ない江戸時代の城門です。

城からも数少ない江戸時代の城門です。



城内から見た千歳御門



城外から見た千歳御門

3 自然がいっぱい、紅葉が鮮やかな高岡古城公園

富山城跡公園の次は、高岡古城公園に向かいます。加賀藩前田家二代の前田利長は天正 13 年(1585)から 13 年間、二上山にあった守山城の城主でした。慶長 3 年(1598)に利家の後を継ぎ藩主となり、同 10 年(1605)には隠居して富山城に移りました。

しかし、同 14 年(1609)3 月の大火により城が焼失したため、新しく高岡城を作りました。縄張り(設計)はキリシタン大名で城づくりの名手として知られる高山右近と伝えられています。入城して 5 年、利長は亡くなり元和元年(1615)の一国一城令により廃城となりました。

しかし、城跡は残り市民の協力により高岡古城公園として今に受け継がれています。



この公園の特徴は、町の中心にありながら、東京ドームの 4.5 倍 21 万㎡という広大な面積を持っています。また、三つの水郷に囲まれておりその面積は全体の 1/3 を占めます。そして、濠はほとんど築城時のままに残され、本丸へつながる土橋には、築城当時の石垣が今も残っています。そのため水郷を巡る「利長号」と「利常号」の遊覧船を運航しています。

また、パンフレットを見ると園内は桜がたくさん植えられていることが分かります。



この桜は独自の新品種と分かり「タカオカコシノヒガン」と名付けられています。でも、今の時期は園内に入ると赤や黄色の紅葉が、辺り一面を覆いとても素晴らしいです。水郷と紅葉の取り合わせが抜群と言えます。

そんな中、園内では雪吊りの作業が進められていて、冬が近いことを感じさせます。

このようなタイミングに訪れることが出来、高岡城の歴史に触れ、園内の素晴らしい紅葉を眺めることができ今回の旅はgoodと言えます。

4 観光客がいっぱいの金沢城址公園

一日目最後の見学は金沢城址公園です。兼六園に来た覚えはあるものの、金沢城公園はよく覚えておりません。高岡から30分少しで到着すると、たくさんの観光客があふれ外国の人も多く見受けれます。

石川門口から園内に入ると、広い芝生の向こうにとっても長い五十間長屋とその両端の橋爪門続櫓（はしづめもんつづきやぐら）と建物の横断面が菱形の菱櫓（ひしやぐら）が目飛び込んできます。櫓（やぐら）の姿はお城の景色としてよく見られるのですが、このとても長い五十間長屋は圧巻です。

また、金沢城ほど多種多様の石垣（野面積みからまで）が存在する城は全国に例がありません。

① 前田利家と金沢城

尾張荒子の前田利昌の四男として生まれた前田利家は、織田信長に従い大名としての基を築きました。信長時代には近江長浜、越前府中、能登七尾の城主となりましたが、秀吉と柴田勝家の戦いの後、秀吉と提携し、天正11年（1583）金沢城に入城しました。

金沢城は寛永8年（1631）の火災以降本丸の機能が次第に二の丸へと移されました。菱櫓、五十間長屋、橋爪門続櫓の形態もこのころに整備されたと考えられています。そして、宝暦9年（1759）の火災を機に完全に本丸から二の丸中心の城へと変化したのです。その後の文化5年（1808）と2回の大火を受け、その都度再建され明治期まで存続しました。



橋爪門続櫓（はしづめもんつづきやぐら）と、五十間長屋を はさんで菱櫓（ひしやぐら）

② 65歳以上は見学無料！

せっかく来たのでとても長い長屋門を見学しようと裏手に回ると、一人320円でした。でも、受付の方が「これのどれかに該当しますか」と聞く。見れば65歳以上の項目があるので、「はい、65歳以上です」

と答えると、何か証明書をおもちですかというので、保険証を提示しました。

でも、妻は持っていなかったのがダメかと思いきや、こちらに氏名・年齢を記入すればOKと云う。まっ、妻を見て40代とか50代とは思わないにしろ、申告するだけでOKというのはお役所らしからぬ取り扱いに感心しました。石川県人は心が広いのかな。

櫓の中は木材がふんだんに使用された造りで、日本建築の優美さのようなものを感じ、見学したことで金沢城は、五十間長屋がすごいという強烈な印象を持ちました。



ここ金沢城公園は紅葉を見る場所というより、お城を見学して前田 100 万石に想いを馳せるということでしょう。

参考 前田藩 計約 120 万石

本藩: 金沢藩 102 万石 (金沢市) 飛び地として滋賀県高島郡今津町

支藩: 富山藩 12 万石 (富山市)、大聖寺藩 7 万石 (加賀市)、

上野七日市藩 1 万石 (群馬県富岡市七日市)

異色な家来衆: 本多正重 (筆頭家老 5 万石、家康の家来本田正信次男)、成瀬吉政 8 千石 (尾張徳川付け家老犬山城主成瀬正成の弟)

初日は三か所を回りましたが、いずれも素晴らしい美しさと歴史に彩られたお城でした。この後は、山中温泉が今日のお宿になります。温泉も楽しみの一つです。

以上